ゆがけ

●ゆがけの特徴

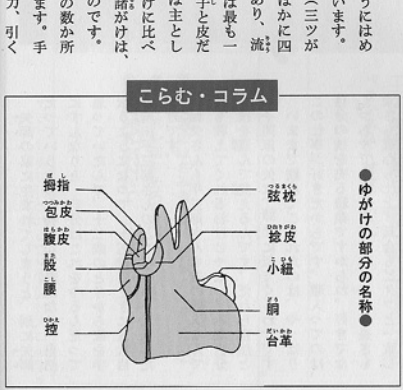
矢を射る時に、右手が痛くないようにはめる手袋に似たものを「ゆがけ」といいます。親指、人差指、中指の三本のもの（三ツがけ）が最も簡略な形ですが、そのほかに四本（四ツがけ）、五本（諸がけ）があり、流派によって形が違います。三ツがけは最も一般的なもので親指に木を入れた堅帽子と皮だけの柔帽子があります。柔帽子は主として初心者用です。四ツがけは三ツがけに比べて親指が長く、強い弓が引けます。諸がけは、馬上で使う手袋を堅帽子にしたものです。

ゆがけは、それぞれ、使う人の手の数か所の寸法を計り、注文によって作られます。手の肉厚（普通、厚目、細目）、弓の力、引く力、経験などによって、微妙に調整され、その人の手に合った、最も引きやすいゆがけが出来上がります。

材料である鹿の皮はおもにキョンという鹿

こらむ・コラム

●ゆがけの部分の名称●



で、中国から輸入されます。これに代わる鹿皮は、北米、ニュージーランド、ブラジルなどからも輸入されています。特別注文の高級品には、金箔で家紋を入れたり、親指の付け根（腰）の部分に鯛皮を使ったりと大変豪華なものもあります。

●現在の志太のかけ師

かけ師の仕事はなかなか機械化できるものではありません。そのうえ、「ゆがけ」というもの自体が、ひとつ作ったら何年、何十年も持つという寿命の長い道具です。手作りのものは、何度も何度も修理して使われます。「他には変えられない大切なもの」という意味の言葉に、「かけがえのない」という言葉があります。

この「かけ」は「ゆがけ」から来ているという解釈もあるほど、その人の手にあったゆがけは他には変えられないものとなり、大切に使われます。近年、弓道は高等学校のクラブ活動で行われるなど、競技人口が増えているため、ゆがけだけでも年間約五万個の需要があるといいます。そのため、初心者用のものは大量生産されていますが、職人の手作りにより丹念に縫われたゆがけは弓道家に珍重されています。

現在、日本全国にかけ師が十四名いますが、そのうち焼津市に五名、藤枝市に二名、大井川町に一名と、計八名が志太地域に住んでいます。手作りの出来る職人が年々減少していく中で、全国的にも貴重な地域となりつつあります。矢と同じく、後継者にも恵まれ、志太のゆがけ師の技術はしっかりと受け継がれていきます。